

しまんと

発行：四万十町教育研究所

第114号（通し番号）

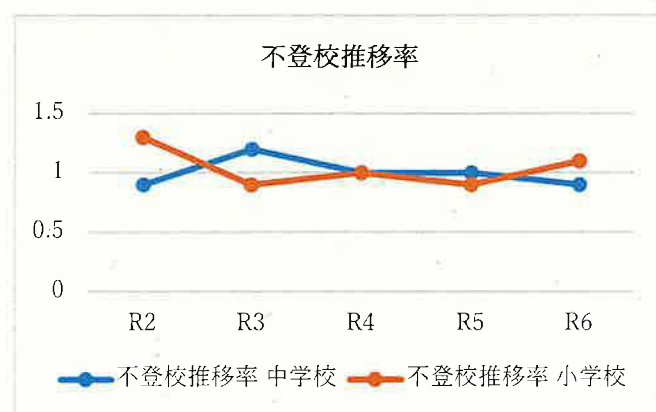
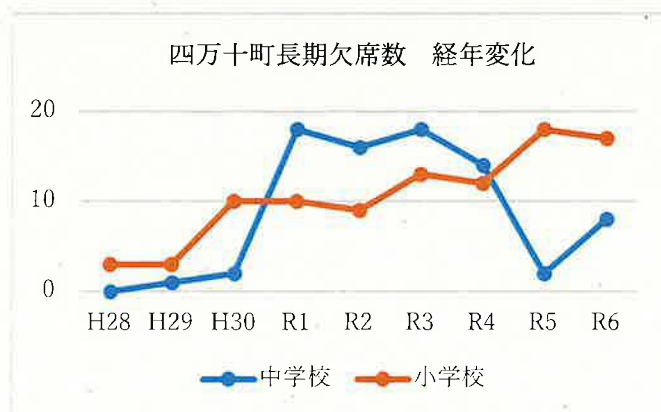
令和7年11月21日 発行

2025年もあっという間に終わろうとしています。学校関係者の皆様におかれましては、ご多忙の日々をお過ごしのことと存じます。寒くなってまいりますので、健康には十分注意され、2学期を乗り切っていただきたいと思います。

さて、先日文部科学省から2024年度の問題行動・不登校調査の結果が発表されました。不登校児童生徒は35万人となり、過去最多を更新。12年連続で増え、26人に1人が不登校ということになります。文科省は不登校増加の要因を「無理に通学する必要はないといった保護者の意識変化」とみています。本町においても、そういった意識の保護者も少なくなく、「積極的な登校刺激はやめてほしい」、「登校の意志は子どもに任せている」などといった意見も見受けられ、学校としても対応に苦慮していることと思います。しかし、学校は支援会や家庭訪問、電話、そして、リモート授業等、様々な努力をされているとお聞きしています。本当にありがたいことです。

そして、不登校の要因に「無理して通う必要はない」との社会意識の変化があるとすれば、不登校が減少することはないでしょう。では、どのような対策が必要なのでしょう。文科省は子どもたちが安心して、学べる場所の整備が必要であるとの見解を出しています。今、フリースクール、校内サポートルーム、教育支援センターなど、安心して過ごせる場所の提供は必須です。

四万十町としても学校復帰だけを目的にするのではなく、不登校児童生徒の社会的自立を見据えた学び場の提供も視野に、教育支援センターでは個に対応した学び場の提供を考えました。今後、自宅に近い公共の施設での学び場も支援の場所として提案していく予定です。そのためには、校内での支援会での情報共有が大切になってくるかと思っています。教育研究所SSWや発達教育支援員（ST）教育支援センター指導員にもご相談を寄せていただくよう、お願いします。



上は四万十町内の長期欠席の経年変化です。少しずつ増加の傾向は全国と同様です。小学校低学年の増加が気になるところです。教育支援センターを活用している生徒については、最近どんどん積極性が増し、自分の決めたことを目標に努力している姿が見られ、指導者もやりがいを感じています。

10月、教育支援センターは日頃、運動量の少ない通室生に運動をさせようということで、高知のボウリング場に行ってきました。子どもたちは初めての経験で、ガーターが多かったそうですが、楽しい疲れを感じて帰ってきました。今後もこの子ども達のために、いろいろ工夫をしていく教育支援センターです。



各校での ICT 活用事例の紹介

仁井田小学校の1・2年生がロイロノートを用いて算数の授業実践をされていました。ロイロノートに、自分の考えを書いたノートの写真をアップロードし、それを電子黒板に写して共有する活用方法でした。1年生も2年生も、自分たちで授業を進め、ロイロノートを活用していた姿が印象的でした。また、今回は研究員として微力ではありますが、ロイロノート活用のサポートをさせていただきました。今後も、少しでもお力になれるように尽力して参りますので、ぜひお気軽に研究所までお声がけください。



七里小学校は、リーディング DX スクールとして ICT 機器の活用を通して、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた取り組みを進めています。その一環として、2年生が単元内自由進度学習に取り組んでいました。Figjam やスプレッドシートを活用して、常に他者参照ができる状態で座席や取り組み方も個人の判断で授業が進んでいました。一斉指導のよさ、協働学習のよさ、それぞれのメリットやデメリットを理解し、より子どもたちの学びに最適な形態で授業及び単元計画を作成していくことが大切なのだと学ばせていただきました。2年生でもここまでできるという姿をぜひ皆様にも知っていただきたいです。



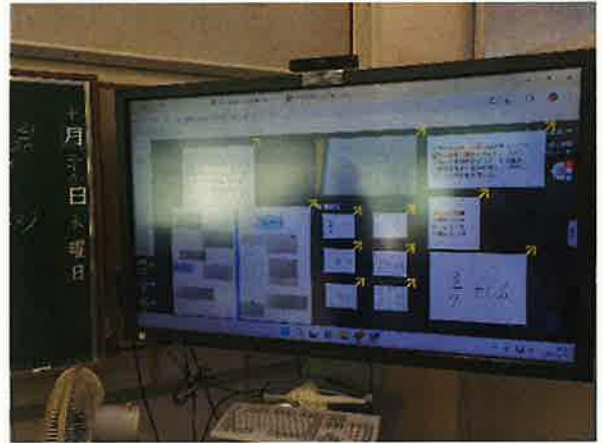
川口小学校の5, 6年生ではスプレッドシートを活用した算数の授業が行われていました。めあての確認後、一人学びの時間を数分取ったのち、途中経過をスプレッドシートに上げ、その後再度一人学びの時間を取っていました。自分のペースで学習を進め、学びを深めるために協働学習を行う姿がそうすることで見通しが持ていなかった児童も友だちの考えを参考にして取り組むことができています。毎時間の振り返りもスプレッドシートに蓄積されています。

授業を参観して感じたのは、「デジタルをいかに使うか」ではなく、「この場面で使えば子どもたち主体の学びに繋がるのでは」と仮説を立てて、ICT 機器を活用していくのが大切なのだろうと感じました。写真でも

分かる通り、具体物が最も効果的な場面では、無理に ICT を用いる必要がないのだと改めて実感しました。



十和小学校5年生の研究授業及び事後協議に参加させていただきました。算数科での実践で、工夫された導入の後に主体的に学習に取り組んでいる子どもたちの姿が印象的でした。ICT機器を日常的に活用しているため、子どもたちは先生の指示がなくとも自分たちでロイロノートを活用して意見交流をしていました。



事後協議では、先生たちが figjam を用いて事後協議をしていました。どの先生も当たり前を活用することで、ICTに慣れているのだなと感じました。校内研修から組織的にICTを活用していく取り組みも非常に勉強になりました。



各地での教育DXに係る研究会

*各学校での写真撮影の規定が、「校内研修等自校での周知のためにのみ使用することを許可する」とのことなので、研修会の様子の写真を載せることができません。

【伊野小学校】

1年生 国語 ロイロノートを用いた協働学習

これまで経験してきた校内研究の進め方：個人が教材研究をして指導案を作成→職員会等で複数人で指導案の内容についての検討

伊野小学校の校内研究の進め方：低中高のブロック毎に教材や学習指導要領を熟読して教材研究→この単元で付けたい力等についてプレゼンを共同で作成→学習指導案の共同作成→授業実践・振り返り

授業者も周りの教員も、学習指導要領を根拠にしていることで経験年数だけに捉われず、共通の言語で授業を作り上げることができるのだらうと推察しました。授業の振り返りにおいても、指導法の話だけで終わることなく、教科や教材の本質について振り返ることができるため、非常にメリットが大きいと感じました。

教材研究においては、「つけない力」「資質能力」「縦・横・単元のつながり」などを意識することが大切だが、大切だと言われてもそれをどうやって研究してよいのか一人では分からない。複数人で共に取り組むことによって若年でもベテランでも関係なく本質的な教材研究に取り組むことができることもメリットだと仰っていました。

【野市小学校 令和の授業 DX】

公開授業 4年生「ごんぎつね」

子どもが教科の見方・考え方を働かせるために、デジタル学習基盤を活用し、情報の収集・整理・分析を行うことの重要性について学ぶことができました。例えば、言葉による見方考え方を働かせて国語を用いて正確に読み取る→「いっていますじゃなくて、ぶつぶつって書いてあるよ。」

「『ぶつぶつ』って、いいことを言っている感じじゃないよね。調べてみよう。」

と、こんな会話を自然とできる子どもが育つには、これまでにどのような指導が必要なのか。どのような環境作りが必要なのかということを念頭に、日々の授業づくりをしているとのことでした。

また、東部教育事務所の指導主事より、「学習過程でデジタル学習基盤を活用し、情報の収集、整理、分析を行うこと」が、国語の教科の特性である、「言葉による見方・考え方」を働かせるための効果的なクラウド活用だというお話も聞かせていただきました。

見方・考え方を働かせるための効果的なクラウド活用について

学習過程でデジタル学習基盤を活用し、情報の収集、整理、分析を行う

